

しゅんりゆう ほうじょうときより
春流（北条時頼）

しゅんりゆう きし たか
春流 岸よりも 高く

春流高似岸 細草碧於苔
小院無人到 風來門自開

解説 春の訪れを人里から離れた粗末な庵で詠んだ詩。

さいそう こけ みどり
細草 苔よりも 碧なり

語釈 ※春流Ⅱ春の川の水の流れ。春の川は、雪どけの水をのんでいるので、豊かな流れとなる。※細草Ⅱ若草。新芽を出したばかりの草。
※小院Ⅱ小さな庵。草堂。

しょういん ひと いた な
小院 人の 到る 無く

通釈 春の川の流れは、雪どけの水をたたえて豊かな流れとなり、岸を越すほどであり、岸边には若草が生えそろい、苔よりも緑濃く青々としている。この春景につつまれた草堂は、人の訪れることもなく、ただ春風だけが吹いてきて、門の戸がひとりでに開くのだ。

かせ きた もん おのずか ひら
風 来つて 門 自ら 開く